サッカーの話をしよう

旅するワールドカップ

ワールドカップ16万キロの旅をおいかける！

80年にわたるワールドカップの旅は、地球4周分。そして2010年、けたたましくブブゼラが鳴り響く南アフリカが世界を待っている！

大住良之

2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICA™

あすとろ出版

●目次

はじめに

序章 アフリカの大地へ

第1章 ワールドカップの旅

初めてのワールドカップ体験 06/04/19 28
ワールドカップ年齢 02/05/08 32
新潟の夜 02/12/25 35
美しきフィナーレ 02/07/03 38
サポーターがつくり上げた大会 02/12/18 41
ワールドカップにさまざまな評価 02/07/17 46
予選突破の喜び 05/06/15 49
ベッケンバウアーのワールドカップ 06/05/24 52
レーマンに渡されたメモ 09/07/29 56
ドイツの夏が終わった 06/07/12 59
世界一蹴の旅 09/06/24 62

第2章 世界サッカー地図

【南アメリカ】なぜ人材の宝庫なのか
◎アルゼンチン 代表選手のゆりかご 06/11/22 ―― 66
◎アルゼンチン ベロンの故郷 09/07/22 ―― 70
◎ブラジル 世界を席巻するブラジル選手 08/03/26 ―― 72
【中央アメリカ・オセアニア】世界の舞台へ挑戦は続く
◎英領バージン諸島 バージン諸島の悲劇 08/04/09 ―― 75
◎ソロモン諸島 オセアニアの苦闘 04/09/29 ―― 77
【アジア】広大で多様なサッカー大陸
◎カタール 急成長する湾岸の国 03/09/03 ―― 81
◎レバノン 空爆の下で 06/08/02 ―― 85
◎イラン 最後まであきらめない精神力 05/03/23 ―― 88
◎インド 多様性の国 06/10/18 ―― 92
◎朝鮮民主主義人民共和国 尊敬すべき態度 05/02/16 ―― 95
◎ベトナム 戦火にも衰えなかった情熱 07/07/11 ―― 99
◎アジア・サッカー連盟 AFCの50年 04/02/04 ―― 102
【ヨーロッパ】世界サッカーの中心と周辺
◎スペイン アラベスの小さなサンタ 03/01/29 ―― 105

◎ポルトガル 地道に歩むサッカー強国 04/06/16 108
◎ギリシャ チームプレーの徹底でヨーロッパ制覇 04/07/07 113
◎ウクライナ 試練を乗り越え実りの時代へ 05/10/12 116
◎ボスニア・ヘルツェゴビナ 民族のモザイクを超えて 09/05/13 120
◎リヒテンシュタイン 小国の挑戦 05/12/28 122
◎ドイツ 分割されたピッチ 09/10/21 125
◎人種差別問題 耐え難い侮辱 06/04/05 128

【アフリカ】ワールドカップがやってくる
◎南アフリカ ワールドカップは安全か 08/12/17 132
◎南アフリカ ワールドカップ開催の喜び 09/07/01 134
◎南アフリカ 黒人と白人の文化が歩み寄る 09/07/08 136
◎南アフリカ 人びとを結びつけるもの 09/11/04 140
◎南アフリカ 巨大イベントとなった抽選会 09/12/02 142
◎南アフリカ 意味あるスタジアム 09/11/25 145
◎南アフリカ ダニー・ジョーダンの夢 10/01/06 148

第3章 フットボール・レジェンド
白い巨人 アルフレード・ディステファノ 03/07/16 152

なくならない差別 アルツール・フリーデンライヒ 03/04/16 155
英雄たちのいる町 マリウス・ラカトシュ 03/10/22 158
ゴールの予感 ゲルト・ミュラー 04/05/19 161
ゴール後のパフォーマンス エウゼビオ 05/11/16 165
美しく強いセレソンを テレ・サンタナ 06/04/26 168
ディナモの伝説 04/10/13 172
FCバルセロナのエンジと青 05/01/19 175
追悼 ジョージ・ベスト 05/11/30 178
イタリア・サッカーのミスター 06/03/22 182
ウォータイム・フットボール 05/08/24 185
求む救世主 ジュスト・フォンテーヌ 08/10/15 188
40年間続くゴール疑惑 07/10/31 191
30年ぶりに戻った国宝 06/04/12 194
コンビネーション・サッカーの源流 09/02/04 197
背番号の誕生 09/08/26 199
意志ある写真 03/11/19 201
FCトウェンテの誇り 09/09/09 204
ライバルたちのお見舞い 09/04/08 207

第4章 世界ベスト4への挑戦

世界ベスト4は「生き方」の問題 09/09/02 ―― 212
理不尽に屈しない強さ 09/06/10 ―― 215
日本取材陣のチームプレー 03/06/25 ―― 218
自分の目で見た南アフリカを 09/11/19 ―― 221
対戦相手が決まった 09/12/09 ―― 224
勝負にこだわってこそ 10/01/20 ―― 227
アメリカの野心 10/01/27 ―― 230
幸運の主審 10/02/10 ―― 232
日本サッカーの「ワールドカップの父」 09/12/16 ―― 234

付録

1998〜2006年ワールドカップ3大会
日本代表の戦績・戦評・公式記録 ―― 238
日本代表選手ワールドカップ出場記録 ―― 251
ワールドカップ時事年表 ―― 252

初めてのワールドカップ体験

06/04/19

チケットの番号を頼りにたどり着いた席は、ゴール裏、イタリア人サポーターのまっただ中だった。

[*1]1974年ワールドカップ西ドイツ大会の1次リーグ第3戦、ポーランド対イタリア。私にとって生まれて初めてのワールドカップの最終日だった。2年前のオリンピックで優勝し、この大会でもアルゼンチンとハイチに連勝して高い評価を受けていたポーランド。予定にははいっていなかったが、ひと目でも見ておきたいと、苦労してチケットを入手し、シュツットガルトにやってきたのだ。

しかし陸上競技場のゴール裏スタンド、しかも前から10列目の席は、ほとんどピッチの高さで、サッカーを見るどころではなかった。チャンスになると、周囲のイタリア人はすぐに立ち上がってしまうからだ。私もいっしょに立つのだが、前に大男がいたため、あっと思った瞬間にはピッチは視野から消えた。

イタリア人たちは陽気にサッカーを楽しんでいた。シュツットガルトはドイツ南部の町。まっすぐ南下し、スイスを縦断してアルプスを越え

＊文中の所属・肩書き等はコラム掲載当時のものです。

＊1【1974年ワールドカップ西ドイツ大会】
6月14日から7月7日まで、西ドイツ（当時）の9都市9スタジアムを舞台に開催された第10回大会。エントリーは99チーム、決勝大会出場は16チーム。全38試合で集めた観客は176万8152人（1試合平均4万6530人）。決勝戦はミュンヘン・オリンピック・スタジアムで行われ、西ドイツ2―1オランダ。西ドイツが20年ぶり2回目の優勝。西ドイツのDFベッケンバウアー、オランダのFWクライフという20世紀を代表するスーパースターが激突し、サッカーの面ではオランダの「トータルフットボール」がのちの世界のサッカーに大きな影響を与えた。得点王はラト（ポーランド、7ゴール）。日本はアジア・オセアニアの第1次予選で敗退。

れば、そこはイタリアのロンバルジア平原だ。日曜日のこの日、バスや列車、あるいは自家用車でやってきたイタリア人で、７万人収容のスタジアムはぎっしりと埋まっていた。スタンドでは緑・白・赤のイタリア国旗が無数にはためき、1プレー1プレーに反応して大歓声が上がった。

試合は思うように見ることはできなかったが、その雰囲気はワールドカップならではのものだった。サイドからサイドへ大きく振られるポーランドのパスに目を見張りながら、私はその雰囲気を心から楽しんだ。

前半、ポーランドの速攻に2点を許したイタリアは、温存していたエースのボニンセーニャを後半から投入した。イタリア語の場内アナウンスで彼の名が告げられる。すると、私のすぐ背後から、低くうめくような女性の声で「ボーニン、セーニャ…」というつぶやきが漏れた。

サッカー場であれば、大声で歓声が飛ぶ場面のはずだった。実際、周囲からは盛大な拍手が起こっていた。しかし私の耳にはいってきたのは、不思議な響きの声だった。思わず振り返ると、深刻な表情の老婦人と目が合った。

そのつぶやきは、「祈り」といった浄化されたものではなかった。どこか土俗信仰のような、呪術的な響きがあった。

だがその思いは届かなかった。後半の追撃空しく、イタリアは1―2

で敗れた。

ところが試合が終わっても誰も席を立とうとはしない。ブーイングもない。不気味な静けさのなかで、人びとはある知らせを待っていた。ミュンヘンで行われていたアルゼンチン対ハイチの試合結果だった。前の試合で、イタリアはアルゼンチンと引き分けていた。アルゼンチンがハイチに勝てば、イタリアと勝ち点3で並ぶ。問題は得失点差だった。ハイチには3―1の勝利だったイタリア。アルゼンチンは？

永遠のように思われた5分間が過ぎ、電光掲示板に数字が表示された。「アルゼンチン―ハイチ　4―1」。イタリアの「ワールドカップ74」が終わった。

暴動でも起こるのではと、私は心配になった。少なくとも、いろいろなものが飛んでくるのではないか…。

しかし何も起こらなかった。イタリア人たちはみんなうつむいていた。そして無言のまま、ぞろぞろとスタジアムを去っていった。彼らが本当にこの敗退を悲しんでいることが理解できた。

私にとって最初のワールドカップ。クライフ（オランダ）を中心に、すばらしいプレーも見た。しかし最も心に残ったのは、この日のイタリア人たちの陽気な観戦ぶりと、あの老婦人のつぶやき、そして敗退が決

まった後、無言でスタジアムを後にする人びとの列だった。それは、サッカーというスポーツがいかに世界の人びとの生活に浸透しているか、強く感じさせられた体験だった。

世界ベスト4は「生き方」の問題　09/09/02

「ワールドカップでベスト4」などと言ったら、世界中が笑うにちがいない。なにしろ、ホームで開催された2002年大会を別にすれば、2大会、6試合で1分け5敗という悲惨な成績の日本なのだ。

日本にも笑う人がたくさんいる。だが、日本代表監督・岡田武史[*1]は、09年1月、意を決してそう宣言した。

「岡田監督は目標はワールドカップ・ベスト4と語っていますが、可能でしょうか」

以後、日本代表と対戦したチームの監督会見では、必ずこうした質問が出た。通訳された質問を聞いて、外国の監督たちは一様に困惑した顔をした。そして適当なコメントでお茶を濁した。

「サッカーに不可能はないよ」うんぬん。

「ワールドカップ・ベスト4」といっても、日本のサッカーはその距離感さえつかめない。出場4回目。02年にはベスト16に進んだが、他の2大会では勝利さえない。常識的には「1次リーグ突破」が現実的な目標だ。それさえ世界から見れば「奇跡」だろう。ベスト4になるには、そ

*1【岡田武史】日本代表監督。1956年8月25日生まれ、大阪府大阪市出身。早稲田大学を経て日本サッカーリーグの古河電工で活躍し、日本代表24試合1得点。1990年に引退、指導者となる。1994年12月に日本代表のコーチに就任、1997年10月4日、カザフスタンのアルマトイで行われたワールドカップ予選（1―1で引き分け）で解任された加茂周監督の後を継いで、Jリーグでの監督経験をもたないまま日本代表の監督に就任した。そして苦闘の末、日本に初めてのワールドカップ出場をもたらした。3戦3敗で終わった98年ワールドカップ・フランス大会

こからさらに２試合勝たなければならない。

しかし私は岡田監督を笑う気にはなれない。いや、「それしかない」とさえ思う。

日本はアジアでは確固たる地位を築き、ワールドカップ出場自体はもはや「挑戦」ではなくなった。だが上位進出が見込めるわけでもない。大きな期待を受けた06年大会も１分け２敗だった。世界のトップクラスとの力量差、競技環境の差を考えると、１０００メートルもの岩壁を見上げたときのような、途方に暮れた思いを抱かざるをえない。普通に準備して大会に臨んでも、失望を繰り返すだけだ。

だから「ベスト４宣言」なのだ。

出場権を得たことで満足せず、その上に行くんだという高い「志」を抱き、生活のすべてをワールドカップで勝つことに向けた努力に費やす――。巨大な壁を乗り越えるには、尋常ではない覚悟と努力を必要とする。

「ベスト４宣言」は「生き方」の話だ。可能かどうかを検証するものではない。問うべきは、それに向かって選手たちが毎日を生きているかどうかだ。

ワールドカップ開幕まで９カ月あまり。その覚悟が問われる絶好の機

後に辞任、翌年からコンサドーレ札幌、２００３年からは横浜Ｆ・マリノスの監督を歴任、横浜ではＪリーグ連覇（２００３、２００４）を成し遂げた。２００６年のなかばからサッカーを離れていたが、２００７年11月に日本代表監督イビチャ・オシムが脳梗塞で倒れたことから監督就任を依頼され、12月に監督に就任、２カ月後に始まったワールドカップ予選を勝ち抜いて日本に４大会連続のワールドカップ出場をもたらした。

会が訪れた。２００９年９月５日、アウェーでのオランダ戦だ。「ワールドカップ・ベスト４クラス」を相手に、日本代表はどんな戦いを見せてくれるだろうか。いまは笑われてもいい。本気で挑んでいる姿勢を示してほしい。